
能面少女

林原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能面少女

【Nコード】

N8135P

【作者名】

林原

【あらすじ】

能面のように無表情な少女が表情と記憶を取り戻すまでのお話。

ゆめ

気が付くと、私は混沌とした意識の中にいた。夢を見ているのか、視界がぼんやりとしている。

懐かしい香りがする。

ふるさとの香りとも言うのだろうか、

どこか田舎を連想させる匂いである。

周りは一面緑に囲まれている。

道の向こうで、おそらく同年代くらいであろう少女がこちらへ人懐っこい笑顔を向けている。

何か言っているようだがよく聞き取れない。

彼女はくるりところちに背中を向けると、どこか遠くへ走り去ってしまった。

待つて、と叫ぼうとするが声が出ない。筋肉が硬直してしまったかのように体が動かない。

私はただ立ち尽くしながら、彼女が走り行く様をただ見つめることしかできない。

私は跳ね起きた。すごく寝汗をかいている。

そして、この夢を見るのは初めてではない。

おそらく以前にも見たことがあったはずだ、あくまでおそらくだがしかし、それがいつのことであったか、彼女は誰なのかしばらく考えても思い出すことができなかった。

それにしても、やけに早く目が覚めてしまった。時計は朝の5時を指している。

眠気覚ましのココアでも淹れてくれる人でもないものか。

もっともそんな人はどこにも見当たらない。

自嘲気味に笑おうとしたが、顔が引きつってうまく笑えなかった。

物思いにふけっていると時刻はすでに6時を回っていた。

そろそろ学校へ行く準備をしなくては。

眠い目を擦りながら機敏な動作で立ち上がると、対照的にのんびりと歩き出した。

棚に置いてあったパンを一口かじると洗面所に向かい、

歯ブラシを咥えながら手早く服を着替え、髪を軽く整えるとソファに横たわった。

5分もかかっていないだろう。毎日やっていれば慣れるものだ。家を出るまであと30分以上ある。少々休憩することにしよう。

ゆめ（後書き）

小説初挑戦なのでドキドキです。

あさ

少女は、走っていた。

教科書のたくさん詰まったスクールバックを振り回し、さらさらの肩まで伸びた髪を振り乱し、

整った顔をゆがめながらも、

一生懸命に走っていた。のだが、

少女は悲劇的に走るのが遅かった。

小学生には軽く抜かされ、自転車をこいでいる老婆にも抜かされ、はたから見ると軽くジョギングをしている様にも見えるが、

これが少女の本気なのである。

そんな走るのが苦手な少女がなぜ走っているのかというと、

理由は単純である。寝坊したのだ。

いつも一緒に行く友達を迎えに行ったが、先に行ってしまったようだ。

もう、薄情なんだから。とは思いつつも、少女はそこまで怒ってはいなかった。

その友達がそんな性格であることを理解していたからである。

前に人影が見えた。

薄情な友達、もとい、石神^{いしがみりん} 凜である。

石神はさらさらの黒髪にきりつとした大きな目、

雪のような白い肌となかなかの美少女である。

だが、能面のように無表情で、口は堅く真一文字に閉ざされている。どこか妖しい雰囲気があり、それがよりいっそう魅力をかきたてている。

「凜ちゃん!」

少女が明るい声で呼びかける。

石神はくると振り向き「遅い」と独り言のように呟くと、そのまま歩き出した。

「あはは、ごめんごめん」

少女はそう言くと、石神をあわてて追いかけた。

「凜ちゃんは何時に起きたの？ ゆず…わたしなんか、6時40分だよ」

少女は自分の事を名前で呼んでしまう癖があり、矯正しようと頑張っているが

ときどき無意識に口走ってしまう。

「5時。家を出たのは6時45分」

石神が呟く。

6時45分に家を出たのにまだあの場所を歩いてたってことは… ゆっくり歩いて、待っててくれたのかな？

少女がそんなことを考えながらにやにやしていると、

「何だ」

石神が少し恥ずかしそうに言った。

「うつん、なんでもない」

少女はこぼれる笑みを隠せないまま返した。

かいそう

私は金曜日が好きである。

同じクラスの琴浦ことくら 柚ゆずは

「次の日が休みっていいじゃん」などとほざいていたが、本当に安易な考えだと思う。

考え方などそれぞれなのだから仕方がないとは思うが。

しかし、なぜ私は金曜日が好きなのだろうか？

確かに翌日は休みであるし、特に嫌な授業があるわけでもない。以前に悪い出来事でもあったのだろうか？

全く心当たりがないが……まあ、それも仕方がないだろう。

私は小さいころの記憶がほとんどないのだから。

記憶喪失、といえるのだろうか？

私には幼稚園の頃の記憶が全くないのである。

小学生のころの記憶も、すべて三年生から始まっている。

何か記憶をなくすほどのショックな出来事でもあったのか、それともただ忘れっばいだけなのか。

しかし、私は記憶力には少々自信があるつもりなのだが。

私はいままで3回転校した。

もっともそのうちの一回は幼稚園の頃らしく覚えていないので、親に聞いた話なのであるが。

ここに来たのもつい3か月ほど前で、同時に転校してきた人が3人ほどいた。

琴浦 柚もその一人である。

転校初日、一人で帰ろうとしているとふいに肩を叩かれた。

琴浦だっただろうか。私と同じく今日転校してきた子だ。

「えっと、石神さんだね。んっと、わたし、引越してきたばかりで帰る人がなくなつてさ…その、えっと、一緒に帰らない？」

嘘である。さつき、数人の女子と一緒に帰ろうと誘われていたはずだ。

私が一人だったので、同情して一緒に帰ろうと言ってくれたのだろう。

優しさの押し売りというか、偽善者というか。

「別に一人で帰れる。それに、さつき誘われてたんじゃないのか？」
そんな気持ちが少し漏れてしまったのか、案外冷たい言い方になってしまった。

こういうタイプの人間は無駄に傷つきやすい人間が多い。すぐ引き下がるだろう。

「ごめん…でも、わ、わたしは、石神さんと帰りたくつて、えっと…迷惑だったなら、ごめん。でも、わたし、えっと、一緒に帰りたいくつて」

だめかな？つていうか帰ろう、えっと、もちろん、凛ちゃんがいやじゃなかったらだけど」

案外しつこいな。お前に凛ちゃん呼ばわりされる筋合いはないのだが。

しかし、まあ、私も鬼ではないし、その…一緒に帰ってやつてもいいかもしれない。

一緒に帰ってほしいと言われたことが嬉しかったわけではない。ただの気まぐれだ。

「…琴浦。じゃあ、行くか」

これが、正反対の性格である私と琴浦が一緒に登下校するきっかけとなった出来事である。

につき

「ただいまーっ」

誰もいない家に向かって大きい声であいさつをする。

まわりから見たら痛い子かな、少なくとも凜ちゃんにはまた馬鹿にされると思う。

凜ちゃんは勉強もできるしキレイだし、スタイルもいいしで三拍子揃ってる。

それにクールだしかつこいいし、なんかもう憎たらしい。でも、わたしだって、凜ちゃんの弱点知ってるんだから。

重いカバンを部屋に置き、Ｔシャツにパンツードというだらしない恰好でリビングに行く。

親がいないときくらい、グーダラしたっていいよね。ふと机を見ると、「わたしのにつきちよう」と書かれた本が置いてあった。

「ももぐみ ことつら ゆず」…わたしの日記だ。全然覚えてないけど、日記なんかつけてたんだな…。ちよつと見てみよう。

「 1がつ3にち

きょうから につきおつけます なんでもかていうと もじおかくれんしゅうには

いいって ねねちゃんが いったから 」

ねねちゃんって誰だろ、幼稚園の頃の友達かな？

「 1がつ5にち

につきてまいにちかくんだね わたしりませんでした あと
もじおかくのおは を っていうじをつかうんだってめんど
くさい」

幼稚園のころから面倒くさがりは治ってないんだな。
余計なところばっかお母さんに似てるんだから。

「 1がつ6にち

きょうは、しをつくった
さむーいさむーい ゆきだるま とけないように ゆきだるま」

バカっぽい詩だな、まず五・七・五でもないし。
このころに比べたらわたしって成長したよね、うん。よかった。

「 1がつ7にち

ねねちゃんがいなくなった どうしてだろ ねねちゃん
またわたしにおべんきよとかおしえてくれるっていつてたのに
ねねちゃん ねねちゃん どこにいくの おいてかないで」

涙の跡と見られるものがあちらこちらについている。

そんなに仲が良かったんだろうか。

その割にはねねちゃんが誰だか全然思い出せないんだけど…

次のページから先は、なぜか破り取られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8135p/>

能面少女

2011年10月8日14時07分発行